

私が長良川河口堰問題に強い関心を抱いたきっかけは、当時の鵜匠頭・山下善平さんにお話を伺った事でした。

昭和 43 (1968) 年、長良川河口堰の建設基本計画が閣議決定、昭和 53 (1978) 年、岐阜県知事が着工に同意すると「建設反対」「推進」の声が毎日のように新聞紙上を賑わすようになりました。

そんな中に、山下さんの堰建設に強く反対される談話を見つけました。しかも宮内庁式部職との肩書が付いていました。このような肩書を持たれる方が、政府の決定に異を唱えられることは並々ならぬ事態だと考え、山下亭を訪問し「鵜飼に影響があるのか」とお聞きすると、「鵜飼(アユ)だけの問題ではない、長良川が死んでしまう」と自然生態系について科学的に解説していただきました。

当時から私は岐阜県自然環境保全連合(略称・自保連)と云う自然保護団体に所属しておりました。

自保連としてもこの河口堰問題に積極的に取り組むことになり、私が担当することになりました。

まず手始めに、当時の環境庁、建設省に、“環境アセスメント”を実施するよう要望しました。その回答が「法的根拠がない」との理由での拒否でした。

行政がやらないのであれば、自分たちの手でと、ダムのない自然河川・長良川の自然を調べ記載しようと考えたのですが、自保連メンバーだけではまったくの力不足です。

岐阜県野鳥の会の賛同も得て、個人参加も募り、岐阜大学教育学部生物学科教授の山内克典先生に団長をお願いし、「長良川下流域生物相調査団」を 51 名で発足させました。1990 年秋のことでした。

長良川下流域の生物を総合的に調査するため、魚類、プランクトン、底生生物、昆虫、哺乳動物、野鳥、植物の 7 班に分かれ、互いに連絡を取り合いながら、班独自に調査を開始しました。

調査が進むにつれ生物と水質など環境の問題にも突き当たり、班の枠を超え多くの人員を動員して塩水遡上、塩水くさびの調査、河口からの標高差を調べる水準測量も行いました。

その結果は、『長良川下流域生物相調査報告書』・1994 年 7 月 9 日発行に詳しく報告しましたが、自然河川・長良川の自然は予想以上に豊かであり、河口堰により淡水と海水が分断されれば、多くの生物の生存が脅かされ鵜飼(アユ)だけの問題に止まらないことを知りました。

しかし残念なことに、この報告書の刊行と同時に河口堰は完成し、翌年 7 月に運用が始まってしまいました。

河口堰運用により、長良川の生態系にどのような影響が現れるのか、『報告書』に書いた推論が正しかったのか否か、観察を続ける義務があると考え、運用後 15 年間、

---

科学的に見続けた結果がこの報告書です。

河口堰完成（運用）の前と後の景観は、長良川の堤防道路を下流に向かって走れば一目瞭然です。国内最高レベルだった清流も、今では新幹線鉄橋あたりから下流では、どんよりと濁った広大な水たまりと化しています。

三川公園より下流へと車を進めると、車窓の右（揖斐川）と左（長良川）とでは異質の光景を見せます。揖斐川では浅瀬に広々としたヨシ原が目に入り、オオヨシキリなど小鳥のさえずりが耳に入るのに対し、長良川ではどんよりとした水たまりのみで、ヨシはほとんど姿を消し去りました。旧建設省が、私たちの血税を投じて、ヨシ原の回復を試みた跡も見られますが、セイタカアワダチソウ、オギ、ヤナギなどが生い茂り、水質を浄化する貴重なヨシは見る影もありません。

調査団を結成した当初、調査団の性格は河口堰に反対するものではなく、純粋に科学的調査を目的にしたものであることを確認していました。しかし、この報告書に見られるように長良川河口堰は「百害あって一利なし」の構築物であることは明白です。

私たち長良川下流域生物相調査団は、この報告書の刊行をもって20年間の調査活動を終了します。

今後はこの書の内容をできるだけ多くの人に広め、かつての素晴らしい自然河川・長良川を取り戻すべく努力をしなければと考えています。

2010年6月